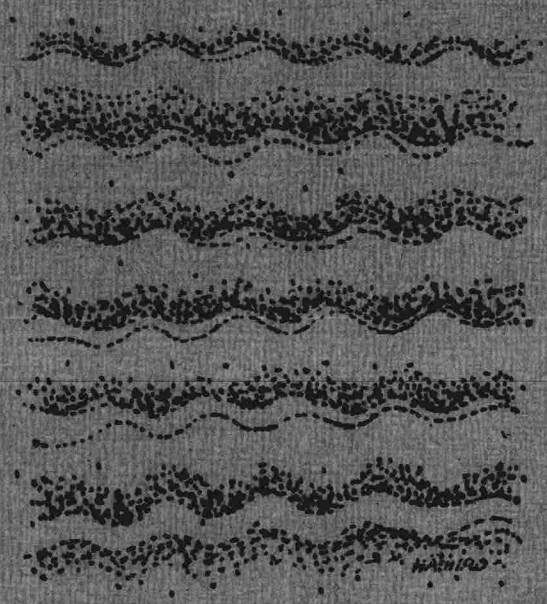
朔風の鐘

一色次郎

三一書房



朔風の鐘　一色次郎　三一書房

一色次郎
いっしきじろう

1916年　鹿児島県オキノエラブ島に生まれる
旅館，デパート，印刷工場，計算尺工場，軍需工場，
官庁，新聞社その他で働く
著書　『青幻記』第三回太宰治賞受賞（筑摩書房）
『東京空襲』（河出書房）

1970年5月31日　第1版第1刷発行

著者　© 一色次郎
1970年
発行者　竹村一
印刷所　暁印刷株式会社
製本所　株式会社鈴木製本所

発行所　株式会社　三一書房
東京都千代田区神田駿河台2の9
電話東京(291)3131～5番
振替東京84160番
郵便番号　101

0093-702021-2726

目次

第一章　十間輪……5
第二章　鎧河岸……57
第三章　北海の謎……113
第四章　五欲……165
第五章　咽ぶ、朔風……225
作品について……285

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongb

朔風の鐘

第一章　十間輪

一

常陸と言えば坂東太郎の利根川に霞ガ浦、水で知られた国でございます。この霞ガ浦を父・飯塚伊賀七が土浦から佐原へ渡船で下りましたのが十八歳の五月、無論まだ独り身で、これが、幾許かの懸念と愉しみが入りまじって胸がときめく、父の初旅でございました。

旅の目的は、二つありました。一つは、伊能忠敬先生への御挨拶、それまでお逢いしたこともなかった方ですけれど、伊能先生は父のお師匠さん格に当たる方で、父がお手紙差しあげたのが御縁のはじまりでございました。霞ガ浦の北岸土浦から西・南へ女の足で小半日程行きましたところに、谷田部という町がございます。ちいさいながら谷田部藩の城下町で、殿様は遠い九州熊本の肥後細川藩から分かれて来られた方でございます。

父はこの城下町で、名主を勤めておりました。自慢めいて恐れ入りますが、谷田部の飯塚と言えば殿様よりも古く、十六代も名主をつづけ、すこしは世間に聞こえた家柄でございます。

名主は上方では庄屋と申しますが、村方三役の筆頭でございますから、土分をのぞく諸民の政を取り仕切らねばなりません。年貢取り立て、水利土木工事、宗門改め、人別改め、訴訟事、お触事の伝達等仕事は幾つもあり、はたの見る目と違い、なかなか心労の激しいものでございます。

なかでも煩わしいのが、田畑の地割りでございます。先祖伝来毎日耕している田畑の面積に、いまさら揉事のおこりようもないはずでございますが、東谷田川、西谷田川、二つの川が北から南へ、スッと御領地を裂いております。大雨でこの土手が切れたり致しますと、あとが大変、畔が流れて一面の泥地に変わり、どこからどこまでが誰の田圃やら畑やら、皆目見当がつかなくなってしまいます。泥が乾くのを待って、土地台帳を元に、計り直すのでございますが、これがキチッと運んだ試しがございません。最後の地所がかならず狭くなり、百姓の間にいさかいがおこり、うまくまとめられませんと、その恨みが名主へ向けられることも間々ございます。祖父はこのためどれだけ難儀したかわかりません。

祖父の苦労を見兼ねたのでございましょう。それに、いずれは自分も名主を継がねばならぬ身分でございます。のちの代まで、こんな揉事が繰り返さるれようでは、とても円満に村を治めて行くことは出来ませぬ。若いながらそこまで考えを進めた父は、思い切って先生に、手紙を出しました。伊能先生もやはり佐原三役の一人として、こうした問題をいつも見事に裁いていらっしゃる、という評判を聞いていたからでございます。

佐原からは、じきに返事が来ました。大要次のようなことが書いてございました。

「お手紙拝見致しました、量地については当方もそちら様のお父様同様苦心致しておりますが、気のついたことを一つだけ申しますと、土地台帳がつくられた時分と現在と、量地に用いた間縄が違うのではございませんか。御存知のように、朝縄夕縄と申す言葉がある程で、藁縄は湿めると伸びるし乾けば縮む、量地の日の天候次第で生きもののように変わる、始末に負えないものでございます。このため村三役は苦労が絶えず、年より早く額に間縄の皺が寄ると申す程で、量地がはじまりますと寝言にも、歪んでおる、歪んでおる、と呼ばわってはねおきる程で、恐らくそちら様のお父様も御同様と御推察申し上げます。そこで縄の件でございますが、いまはどちら様でも昔のような荒縄は用いておりませぬ。値は張りますが、漆縄をこしらえるのが最上かと存知ます。でなけ

れば竹縄も一法でございますが、これは持ち運びが不便な上に量地の最中破損が多くなかなかに厄介なものでございます」

量地は土地の測量のこと、竹縄のつくり方もくわしく書いてございます。まわり五六寸の竹を一丈三尺に切り、箍竹のように八つに割って、末の五寸を入れてたがいにつなぐ、――細い竹を差しつないで使用するというやり方でございます。朝縄夕縄を知らないわけではございませんでしたが、大変お恥ずかしいことながら、谷田部ではいまだに荒縄を用いておりました。佐原の先生のお手紙を前にして、早速三役協議でございます。

漆は容易ならぬものでございます。江戸幕府は漆奉行を置き、各大小名は百姓の持山に漆の木をかぞえて漆年貢を取り立てる程でございますから、貴いもので値が張ります。量地に用いる程の長い縄に、このようなお品で細工をするなぞとても叶わぬことでございます。そこで谷田部では、ふんだんに繁っている竹でこしらえることになりました。金属のように竹には狂いがないとは、佐原の先生に教えられてこれもはじめてみんなが知ったことでございます。

「なるほどのう。縄のたるみが夢にまで気になり、年より早く額に間縄の皺が寄る。いずこの名主も辛いものじゃのう」と、祖父。

「おもしろいことをおっしゃる先生ですね」父もお目にかからない前から、佐原の先生に大層好意を感じたようでした。早速父はお礼状を書きます。

伊能忠敬先生への御挨拶をかねて、香取大神宮の御田植御神事に御参拝したいのが、父の初旅のもひとつの心づもりでございました。香取大神宮については、今更申し上げるまでもございません。佐原と言えば香取、香取と言えば佐原、香取大神宮の宿駅として、栄えた佐原でございますから、そこへ行くからには大神宮に御縁のある日にしたいと父が考えたのも、無理の無いことでございましょう。こうして父は生まれてはじめて、それも一

人で村を出ることになりました。

祖父母の気づかいは、はた目にも可笑しい程でございました。結城紬の着物と羽織を仕立てる、道中合羽も新調する。下着は無論のこと、笠から脚絆に至るまで古いものは何一つ身につけさせません。祖父は祖父で、心づくしの手土産にと筑波の笠間稲荷から蓋附き壺を取り寄せるやら、心は早くも旅の空へ飛んで気もそぞろの父に、こまごまと道中の心得をさとすやら、こうした騒ぎに谷田川の袂まで見送られ、艶々しい頬を朝風に磨かれながら、軽い足取りで城下を後に致しましたのが、その初旅のいきさつでございました。

はじめて見知らぬ土地へ行く、それにこれも経験したことのない水の旅、ゆるやかに流れる霞ガ浦の満々たる水量、ところどころ渦を巻いて急速に走る水脈のおそろしさ、葦の間に糸を垂れる釣人の立つ岸辺の、陸地とも思えぬまでに心もとないその薄さ、白い葉裏を返して微風にそよぐ白楊のひょろひょろとした眺め、いかにも遠くへ運ばれて行くような心地がしたのでございましょう。父は、旅日記に、

「古里から一日離れただけで、このように婆婆の眺めが変るものか」と、溜息まじりに書いております。

暮れ方に船は佐原に着きました。伊能先生のお宅はすぐわかりました。思いがけないことに造酒屋です。間口の幅いっぱいに中二階を上げた立派な建て物で、道ばたに軒まで届くほど空樽が積まれ酒の匂いが流れて来ます。土間の右手が帳場らしく格子づくりになっています。中二階は使用人の寝所でしょうか、小庇をつけた明り窓があります。すぐ前を小野川が流れておりますが、岸は石垣で固め、酒樽の積み出しに船をじかに店先に着けるらしく、一部に階をこしらえてあります。谷田部にも地酒屋はありますが、こんな立派な構えではありません。父はすっかり気押されてしまいました。たそがれどきで仕事は仕舞いになったのでしょう。店先はひっそりしています。隣家との間に常夜燈が立っていました。灯はまだ入っておりません。夕靄が川面から次第に濃くなって来るばかりです。父は、しばらくこの常夜燈のかげに立っていました。当てがはずれてちょっとびっくりしたの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

かも知れません。伊能先生をどんなお方と思って来たのでしょうか。自分とおなじ地主のように考えていたのでしょうか。それとも、漢書に埋まって政事の学問をしながら、毎日子弟を導いている、あごひげの白い学者のように想像していたのでしょうか。造酒屋の主人とわかって、一瞬おどろいたので、常夜燈のかげで、気持ちをととのえていたのに違いありません。すると、土間がポッと明るくなって、背の高い娘が一人出て来ました。付木を持った右手をのばし、左手で袂を引いて白い肌を肱までそっくり露にし、火の粉が自分にかからないように腰を引きかげんにして、ゆっくりこちらへ歩いて来ます。よほど肌色の白い方だったのでしょう。すこし上向けた手首の内側が火の色に染まって、薄赤く透けて見えるよう、——

娘さんは、常夜燈に火を入れに来たのでした。父を見ると、ちょっと足を止めましたが、付木が次第に詰まって来ますので、声を掛けるひまはありません。軽く会釈しただけで、そのまま常夜燈に指先を入れました。

淡い翳の出来ていた娘さんの顔が、その瞬間桜色に光りました。面長な、鼻すじの高い、細い眉のハッキリした立派な娘さんです。富士額が浄らげで、キチッと合わせた襟元から胸、常夜燈の明りに染め出された姿に、なんに例えようもない気品がありました。可愛い口もとに近づけて、上手に吹き消した付木を、そこらに散らかすようなこともなさらず右手に持ったまま、

「どちら様でございましょうか」

自分の家へ来た客と、心得ている様子です。澄んだ、静かな声でした。父は夢から醒めた人のように、うろたえました。ちいさな火を持って、にじみ出るように夕靄の中から姿を見せた娘さんの美しさに、すっかり魂を奪われてしまったのです。

「はい。常陸の国の谷田部からまいりました飯塚伊賀七と申しますが、ちょっと先生に御挨拶させて頂きとうございます」

「父を御存知でございますか」
面識があるのか、という意味である。客扱いに馴れた様子に気押されて、父はいっそうまごついてしまう。脱いだ笠で膝をおさえるように小腰をかがめ、
「以前、お手紙を頂戴致したことがございます」
「左様でございますか」くるっと背を向け店へ戻って行く娘さんが、途中で一度振り返りました。ついて来いとの意味かと解して、父はあわてて歩き出すしまつです。
帳場で、算盤の音がしていましたが、娘さんが声をかけると止んで、それからもまだ何か話している様子です。しばらくすると、やっと、
「ほう」という声が漏れました。父はこの時はじめて、胸のつかえがおりた心地がしました。
「どうぞ、——」
娘さんの言葉もていねいになりました。奥へ通されてから、父はしばらく一人で置かれました。膝の痺れをこらえながら窮屈な構えで居りますと、よほどたってから先程の娘さんが、夕食の膳を運んで来て呉れました。
「父はいま手がはなせませんので、ちょっと失礼させて頂きますと申しております。私は稲でございます」
伊能先生のお嬢さま、お稲さんでございました。
伊能先生はかなり遅くなってから、父が待っている座敷へ入っていらっしゃいました。
先生の酒蔵で毎年どのくらいのお酒がつくられたかと申しますと、一番隆盛の年で千四百八十石、これから上のお酒屋さんは、佐原に一軒しかありません。佐原第二位、大店の大旦那でございます。毎日取り仕切っておかなければならないお仕事が、山程ございます。自分から招いたわけでもない若い客が、ふらっ、とやって来たからといって、そこで帳場を立つことはお出来にならなかったのでございましょう。

「やあ、お待たせしました。何しに御座った。御参詣ですか」と、いうようなことから、お話がはじまりました。父は、居住まいを正して、「先生に御挨拶させて頂きましたあとで、大神宮様の御神事を拝観させて頂きたいと思って参りました。これは、――」と、うしろから箱を引き寄せ、

「筑波稲荷から取り寄せました、笠間の壺でございます。お礼のお印までに持参致しました。何卒お納め下さいますよう。父からもよろしくとのことでございました」

笠間焼は雑器ではございますが、鄙びた味わいがあり、珍重されております。伊能先生は箱から取り出し、掌にかかる壺の肌触りや重みをおたのしみになられたあとで、

「これはこれは結構なお品を、早速娘に与えて、使わせて頂きましょうわい。それで私が差し上げた手紙、何程かお役に立ちましたかのう」

「いろいろと、教えて頂いて、有難うございました。おかげ様で、これからは村も円満に納まって行くように思われます」

伊能先生のお手紙を頂いてからの、村三役の評議の様子、漆縄は費用の点でおぼつかないので、竹を利用することに決めた模様なぞ、父はくわしく話しました。座敷には、父と伊能先生の、お二人だけです。お稲さんは、とっくに居間へさがってしまいました。家の中は、ひっそりしています。でも、どこかに誰か起きているのでしょう。旦那様がこうして、客とお話をなさっていらっしゃるのに、家人がみんな睡ってしまうはずがありません。いまに、お神さんをお引き合わせ下さるのに違いない。父はそんなのんきなことを考えています。先生の奥様が、一度もお顔をお見せにならなくて、食事の間ずっとお稲さんがそばにいらしたことが、不審になっていたのです。父は名主の苦労を一生懸命喋りました。父は体つきはさほど大きいという程ではございません。鋤・鍬を手にしたこともございませんから、肩に瘤なぞ盛り上がっておりません。それに、在の者にしては、色白でございます。

目もと鼻すじが華奢で、役者にでもしたらよろしかろうと思われるような、面貌でございます。いっぽう、伊能先生はと申しますと、こともあろうに、六十歳間近になられてから、日本国中の探検を思い立ち、二十年ばかりも費して、初の日本絵図面を完成された方でございます。その御名声は世界中に聞こえたように伺っておりますが、御老体でこのような大仕事をなしとげられる程御意志のきつい方でいらっしゃいますから、笑顔のすくない、むつかしいお顔をなさっていらっしゃいます。めったに冗談なぞ、おっしゃいません。その伊能先生が、父の話に耳傾けていらっしゃる間に、遠くのものを見つめておいでになるような、深いお目の色に変わりました。話の間に、十何代もつづいた名主の家柄である、父の境遇も、よくおわかりになったようです。父の話が、おわりますと、

「それは、何よりじゃ」と、おっしゃいましたが、そのあと、何か父をびっくりさせてやろう魂胆のありそうな片笑いをなさって、いきなり、こんなことをおっしゃいます。

「谷田川の橋を渡った先に、玉川屋という酒屋がありますのう。あの店の親父は、勝負運が弱いくせに賭が好きで、負けるとちょいちょい差し込みをおこす男じゃったが、いまでも達者でおりますかのう」

「どうしてそのようなことを御存知でございますか」

父がこれ程驚いたことは、生まれてこの方だったかも知れません。伊能先生のお口から、谷田部の話が出ようとは、——

「玉川屋の前に、冠木門の立派なお屋敷がございたが、あそこがお住居でしたか」

「いつおいでになられたのでございますか」

「ずっと、昔、——」と、いっそう、しんみりしたお口振り、

「今日土浦から船に乗っておいでたじゃろう。その町で医家に奉公したことがありましたわい。あなたは倖せな

御身分のようじゃが、私は幼少の時分より大層苦労致しましたわい。親に早く死に別れ、七つから十二まで、漁師の物置き小屋で、乞食同然の暮らしをしたことがあります。そのあと寺の下働きを務めたり、医者の走り使いを致したり、そうこうする内この家へ養子に世話して下さる方がありましたが、女房は四つ年上の後家でありましたわい」

お稲さんのお母さんのことです。父は聞いている内に、胸苦しくなりました。先生のお話は、夜の更けるまで続きました。

潮来をはさんで、東に常陸の鹿島神宮、西に下総の香取神宮、霞ガ浦には二つのお宮がございます。鹿島は古来武の神として栄え、香取のお宮は、農工商にたずさわる者の本業、つまり、生産の神として、一般の尊敬を集めてまいりました。香取・佐原の百姓は、お田植え神事をおえません内は、決して、田植えをいたしませんが、そのような縁起もすべて香取大神宮様に対する、信仰から生まれたものでございます。そのお田植え祭りは、翌る日のたそがれじぶんから行なわれました。かがり火の焚かれる頃からはじまるのが、むかしからの決まりでございます。佐原からお宮までは、小半刻程の道程でございますが、田圃みちを町はずれからお宮まで、この日ばかりは参詣人の途切れることがございません。露店をのぞきながらまいります内に、ほどなく、一の鳥居に行きつきます。笠木と貫の間に額束を挟み、亀腹の上にシッカと両脚踏ン張り、笠木のはしがピンと張って、ちいっとばかしいかつい明神つくりの朱の鳥居はまことにおごそかなもので、かねて見馴れたお稲さんもきゅっと胸緊めつけられた程に結構なものでございました。

「伊賀七さん、一の鳥居でございます」

「はい。さすがに御立派なものと、先程から見とれて居りました」

神事の準備は着々とすすめられているようでございましたが、まだ、間があります。手水舎で口を浄め、三本

杉の神餞所でおみくじを引きました。その段になって、お稲さんがお口の中で、ちいさな声をお出しになりました。父が、午歳のお札をお願いしたからでございます。目が合い、父も悟って、

「お嬢さまも？」

「ハイ、わたしは、正月、――」

「ハイ、私は、三月生まれ。それでは、お嬢さまのほうが、三月ばかしお姉さんでございます」

「おなじ午歳なら、お札もごいっしょに致しましょ」

お札を頂いて、お二人は、三本杉の木影へまいりました。胸ときめかせて封を切ります。ご一緒に、

「まあ、吉！」

「四十九番、吉とございます。『見る人の、こころこころにまかせおきて、木末に澄める、月の影かな』どのような意味合いでございましょう」

「さあ」お稲さんもちょっと小首をかしげなされて、先を読みます。

「願望、おそいが思う通りになる」

「旅たち、利なし行かぬが吉」

「お札なんて、どうせアテにはなりませぬ」

「いえいえ、左様でもございませぬ。学問、努力すればよろし」と、この条を読み上げたのが父、そして次のことを読んだのは、お稲さんでございました。

「縁談、心かわらねばいつか叶う」

神事の太鼓が、鳴りました。

お田植え祭りとは申しましても、境内に田があるわけではございません。神主は斎庭と申しますが、神庭の四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb